

論文

男性の生活の豊かさに向けた“無意識の思い込み”の研究

—ジェンダー平等社会の構築に向けて—

A Study of “Unconscious Bias” for Men’s Life Enrichment
—Exploring How to Make a Gender Equal Society—

森田 美佐 (高知大学教育学部)

MORITA Misa

Faculty of Education, Kochi University

ABSTRACT

This study explores how Japanese men can have their life enrichment from the perspective of gender studies and home economics. This study examined the data by Gender Equality Bureau Cabinet Office. It was about “Unconscious bias” in men’s daily lives.

Men tend to be expected to play the social roles. For example, not only people close to them but also Japanese society require them body strength, making money and maintaining status. When it comes to housework, they are not expected to take care of family members. However, inheriting Japanese “Ie” system becomes men’s responsibility.

To eradicate these biases, women and men need to study to acknowledge their situation and empathize with others in home economics. Fixed gender roles related to the biological differences make little sense now.

I. 問題の所在

本研究の目的は、日本の男性がジェンダーに関する無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）についてどのような経験や思いをもっているのかを明らかにし、性別にかかわらず誰もが生きやすい社会を構築するためには、今後、我々にどのような学びが必要とされるのかを、家政学と家庭科から考察することである。

方法としては、内閣府が行った調査結果を用いる。具体的には以下3点を明らかにする。①日本の男性が、ジェンダーに関する無意識の思い込みに関して経験している具体的な内容、②ジェンダーに関する無意識の思い込みの男性の受け止め方、③このような思い込みから誰もが解放されるために、家政学や家庭科が取り組むべき課題。

ジェンダー平等は、現在、世界で達成されるべき目標の1つであり、国連が掲げるSDGsの目標にもなっている。女性や女兒の人権を擁護し、女性や女兒に対する暴力をなくすこと、男女の賃金格差など経済面における不平等の是正、社会における女性のリーダーシップなど、あらゆる領域におけるジェンダーギャップを無くすことの重要性と必要性は、国連の女子差別撤廃条約にも明確に示されている。

このような取り組みが進む一方で、男性に対する差別や偏見をなくし、男性の生きづらさを解消することの必要性も同様に問われている。男性学の研究においては、社会の「男らしさ」が男性を縛っていることが指摘されている。そこでは、男性が長時間労働に従事しがちであったり、稼得責任を背負いがちであったりすることも指摘されている。対応として、男性が日常的に正直な感情や不安を言える人と関係性を積み重ねること（杉田，2022）¹、男性が若い時から、性別が自分の生き方に与える影響を冷静に考える機会をもつこと（田中，2019）²、男女共同参画社会こそ、男性自らが気づいていない「男らしさ」の呪縛を解きほぐす重要なチャンスと捉え、自分たちの生き方を見つめ直し、女性たちとも議論していく中で、男性自身がより生きやすい社会を形成していくこと（伊藤，2016）³等の提案がなされている。

そこで本研究では、日常生活において、日本の男性が経験したことや気づいたことを通して、彼らにいま見えている、他者から発せられたジェンダーに関する無意識の思い込みの言動の実態と、それらをなくしていくために我々に何が求められるのかを、個人・家庭生活を研究対象とする家政学および家庭科の観点から考えていく。

II. 仕事と家庭をめぐるジェンダー平等意識と無意識の思い込み

(1) 性別役割分業意識

一般論として、日本人の性別役割分業意識は低下している。男は仕事、女は家庭という考え方について、賛成する人の割合は、反対する人のそれよりも低下の傾向にある。

男女共同参画に関する世論調査では、性別役割分業意識に賛成志向の人がおよそ35%であり、前回の調査（平成28年）よりもその割合は低下している（内閣府，2019）⁴。NHKの世論調査においても、「夫は外で働き、妻は家庭を守るべきである」という考え方は、賛成志向の人の割合が40%程度であり、反対志向の割合（およそ50%）よりも、数値としては下回っている（NHK放送文化研究所，2021）⁵。

このNHKの調査では、男性の育児休業をどう思うかを聞いているが、結果として約80%の人々が賛成志向であることも報告されている。加えてこの調査では、選択的夫婦別姓の議論に関してもたずねているが、「同じ名字か、別の名字か、選べるようにするべきだ」という考えの人は、全体の半数を超えている。現状では、男性が外で働き、女性が男性の家へと嫁ぎ、家庭を守るという生き方に固執しない考えをもつ人たちが、主流になりつつあると言えるだろう。

(2) 理念と実生活の理想の乖離

しかしこれが自身の生活になると、上記の結果と同じにはならない。内閣府の調査は、家事や育児や介護など、家庭で担われている役割について、どのようにしていきたいかを問うている。それによると（世論調査では）、家事・育児・介護において、男女とも自分と配偶者で分担することや、外部サービスの手を借りつつも自分と配偶者で分担することを希望する割合が高い。しかしその一方で、女性の場合はどちらかという自分が多く分担することを、男性の場合はどちらかという配偶者が多く分担することを望む傾向が、顕著に表れている（外部サービスは利用しないことも考慮した上での回答を含む）（内閣府，2022）⁶。

実際に、総務省の統計を見ると、男性の家事関連時間は確かに増加しているが、今でも日本の女性の家事関連時間は、圧倒的に男性より長い（総務省，2022）⁷。仕事と家庭生活におけるジェンダー平等の理念と、実生活における家庭生活の方針および実践には、大きなずれがあると言わざるをえない。

(3) 無意識の思い込みへの注目

仕事と家庭における理念としてのジェンダー平等と実生活との間には、何が介在するのだろうか。

本研究ではここで、本人あるいは他者からの「無意識

の思い込み」に注目した。それは例えば、基本的には性別役割分業に反対する意思がたとえあったとしても、実生活では、性別にもとづいた働き方や生き方をよしとする考えを、自分や他者に対して「悪気なく」発することを指す。家事を女性が担うことに違和感をもたない発言をすることや、仕事を長い時間したり沢山稼いだりすることは男性の責任だと信じて疑わないこと等は、「無意識の思い込み」が表面化した例である。このような思い込みをもっている人の言動により、ジェンダーに中立的なライフスタイルを目指す人は（性別にかかわらず）、傷ついたり違和感をもったりするのではないだろうか。

加えて本研究は、特に男性の場合、「弱さ」や「戸惑い」を見せてはいけないといった「男らしさ」に縛られ、男性であるがゆえにその傷つきが表に出にくい状況が生じ、女性よりも生きづらさを経験する場合もあるのではないかと考えた。

そこで本研究は、男性がジェンダーに関する無意識の思い込みの言動について見たり聞いたりした経験が、どの程度あるのかを考察する中で、男性がそのような事から解放されるために何が必要かを考えたい。

III. 研究の方法

調査方法としては、内閣府男女共同参画局が実施した調査結果における自由回答を、男女共同参画局の許可を得て考察させて頂いた。筆者は内閣府の「令和3年度性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査研究」（内閣府，2021）⁸について、結果の詳細データ（自由回答）のダウンロードを内閣府男女共同参画局に申請し、許可を得た。

また、自由回答の分析方法としては、その内容を6つに分け、内容に関連する事柄を記載しているものを1件とカウントした。その自由回答で、複数の内容に関連がある場合は複数のカウントとした。6つの内容とは異なると考えられるものは、カウントしていない。

6つの分類としては、「仕事関連」「稼得・支払い責任関連」「体力強要関連」「家事・ケア関連」「家長・跡継ぎ関連」「個人・地域関連」とした。

「仕事関連」「家事・ケア関連」は、性別役割分業にこだわらないという人が多いという世論調査の結果が出ている中で、実際には女性よりも男性の就業率が高いことや、女性が家事や育児や介護の多くを担っている現実を考えて設定した。

「稼得・支払い責任関連」は、社会に存在する性別役割分業意識に加えて、現実として、結婚している男性の稼ぎ手としての役割意識が強いこと（大槻，2015）⁹から設定した。

「体力強要関連」「家長・跡継ぎ関連」は、上述した伊藤

や田中らも指摘するように、男性ならば不平・不満を言わずに力仕事をするように言われることや、家を継ぐといった家父長制の役割を、男性という理由で担いがちという現状を踏まえて設定した。

「個人・地域関連」は、上記のものとも関連するが、「男らしくあれ」「リーダーであるべき」というようなことを実生活の中で言われたり聞いたりした経験をまとめる上で設定した。

なお回答事例は、基本的にデータの原文を掲載した。

IV. 結果

(1) 回答数と内容

自由回答は全部で1618件あったが、そのうち男性の回答件数は554件である。女性の回答数と比べて、男性の回答数は半数に満たない。また、年代で最も多い回答数は30代（127件）であり、その次に20代と40代が続く。

回答の内容においては、20代が「体力強要関連」が目立つ。30代以降50代までは、「仕事関連」が多くなる。60代では「仕事関連」「体力強要関連」の回答数は減り、「個人・地域関連」が多くなっている。

(2) 自由回答について（■は回答事例）

① 「仕事関連」

仕事においては、「男なら仕事」というように、生物的性差に基づいて、有償労働への従事を当然と言われてたり聞いたりしたという回答や、危険な仕事や長時間労働になりそうな仕事（残業を含む）を求められたという回答が多く見られた。また、それらについて言われた相手は「上司」であることが目立ったが、女性から言われたという回答も見られた。仕事関連に関する回答は主に30代～50代に多かったが、幅広い年代において記載されていた。

■上司から男だから頑張れと言われた（20代）

■新しい職場で働き始めた際、上司から「男性だから教育指導をしなくても怒鳴ればいっだろ」と言われた（20代）

■男なんだから疲れたとか言うなって言われた（30代）

■男のくせに仕事ができないと言われ馬鹿にされる（30代）

■男性なんだから風邪をひいても気合いで休むな（40代）

■遠方への出張を断りづらい。夜中に移動するスケジュールを推奨される（40代）

■男性、又は未婚女性から残業対応の候補者になった（50代）

- 男だから危険作業、男だから運転 同僚の女性から言われる (50代)
- 仕事を辞めることを検討していると親に相談したら、男のくせに、といわれた (50代)
- 男性だから残業 休日出勤が多い (60代)

②「稼得・支払い責任関連」

稼得・支払い責任関連においては、男性が働いて家計を支えることを当然視されることや、何かの行事や家計において、男性が支払うことを当然とされることへの戸惑いも含めた回答が見られている。このような事柄において男性が言われた相手は、自分の親や配偶者の親、そして妻であるケースなどもある。こちらも60代では少ないものの、幅広い年代において記載されていた。

- 男性だから収入を絶対にあげるべきだというマウントを取られることが多い。低収入でもそれなりに幸せに暮らしているのだから好きにさせてほしい (20代)
- パートナーの親に男は稼いできてなんぼと言われた (30代)
- 社会の文化として、男性が家計を担うとういったような空気感がある (30代)
- 就活中に本人が焦ってるにもかかわらず。嫁から次の仕事に早く就くようせかされて嫌な思いをした (40代)
- 病気になるまで現在無職であることを男のくせに情けないと母に言われた (40代)
- 父親だからもっと稼ぎなさいと、妻に言われた (50代)
- 女性から「男だから一生懸命頑張って稼がないと」 (60代)

③「体力強要関連」

男性だから体力があることが当然である、という事を言われたり聞いたりした、という回答も目立っている。またこのことは「仕事関連」(職場で力仕事を強要されること)ともリンクしている。力仕事について言われたという回答は、20代を中心に、比較的若い世代での回答が多く見られている。ここでも同様に、言われた相手は「上司」が多いものの、職場の同僚の女性の態度等から感じたという回答も見られている。

- 力仕事は男がやれ (20代)
- 上司から男性なんだから力仕事でできて当たり前、出来なければ役に立たないと言われた (20代)
- 力仕事が苦手だけど、男なんだから無理矢理やられた (20代)
- 男性なんだからと率先して力仕事しろと言われた

(20代)

- 男性だから力仕事しなさいという辛さ (30代)
- 男性は力仕事をするが、女性は力仕事はあまりさせられないと最初から決め付けている (30代)
- 女性ばかりの職場に私だけ男です。体力仕事は全て私に来ます。上司も女性で当たり前のように指示してきます。重い荷物を持っていても、女性と廊下ですれ違う時は必ず私が避けないといけません。どんな状況でも女性職員ファーストです。 (40代)
- 力のいる作業や集中力が必要な作業をする際 上司から男ならそれぐらいの事ができないといけないと叱責された。女子社員には、全くそのような作業をさせない理由もすぐに文句を言うからやらせられないと話していた (40代)
- 男性だから力仕事するのはあたりまえだと、アルバイト先の上司から言われた (50代)
- 自治会の公園掃除で女性会員から、力仕事は男性の仕事と任された (60代)

④「家事・ケア関連」

家事においては、どちらかといえば年齢が上の男性で、自分の母親から、家事をすべきではないという内容と言われた回答が見られている。しかしここでは、妻に「家事をしないでほしい」と言われたケースは目立っては見られない。ただし妻には、男性であるにもかかわらず家電の操作スキルが優れていないと言われて戸惑う回答があった。

子育てに関しては、特に会社の上司や同僚から、自分の子どもや親のケアをすること自体を、またそのために休暇をとることを疑問視された経験等の記載があった。

- 家庭内で、男なのに全体的に家電がきちんと扱えないと妻から言われた。 (40代)
- 母親に洗い物は女の仕事だと言われた (50代)
- 飲み会で家事一般は女にさせればいいと取引先の経営者が言っていた (50代)
- 掃除、洗濯、食事は女性がするのが当たり前と、会社の女性自身が言っている (60代)
- 洗濯物の出し入れをしている時に母親からあなたそんな事しているのかとみっともないと言われた (60代)

<子育て関連>

- 家事育児は女性のやる事だと両親から言われた。仕事優先で共働きで同じ日に仕事になり子供の面倒見のがおろそかになっていた時 (30代)
- 子どもが入院した時に、男の私が会社を休んで看病に就いたら、父親に不満を言われた (30代)
- 男なんだから子供の事で休みを取るな。と男の上司に

いわれましたね (30代)

■子どもを病院に連れて行ったら、病院の待合室で看護師さんにお母さんは今日来ていませんか?と聞かれたことがある (30代)

■上司から子供のために休みを取ったら、そんな理由で休むのかと言われました (40代)

■私はシングルファーザーです。子育てしながら働いていますが、勤め先の会社では理解されず、転職しました (40代)

■男性の部下が育児休暇を取る際、その上司から男性でとる必要性を理解できないと文句を言われた (60代)

⑤「家長・跡継関連」

ここでは家の継承についての回答が、冠婚葬祭との関連とも重なって見られている。またそのことを、回答者が「長男」として言われたという記載も目立つ。

■長男だから家庭ができたなら親の世話をしると家族に言われた (20代)

■祖母から家督を継ぐのは男性と話があった (20代)

■弟から、長男だから親の面倒を見なくては行けないと言われた (50代)

■亡くなった父の葬儀などの際、母、姉、親戚達から、喪主を初め、様々なことは長男の私がするものだと、私の気持ちとは無関係に、いろいろなことを押し付けられ、理不尽に感じた (50代)

■義父の葬儀に参加するため欠勤を申し出たら、妻の側なのになぜ夫が参加しなければならないのかと上司に言われた (60代)

⑥「個人・地域関連」

上記には直接的には当てはまらないものの、家族や知り合いや地域の人とのかかわりの中で、実生活に存在するジェンダーに根差した決めつけの言葉を言われたり聞いた経験があげられていた。趣味や地域活動における性別での役割分担についての回答や、他者が独自に判断する「男らしくないこと」に自分が当てはめられ、否定的な評価を受けたという回答も見られた。

■会社で、「男性だからグループの中心になれ」と言われたこと (20代)

■男だからしっかりしなさいと言われた (30代)

■男性だから女性には何事も負けてはならない (40代)

■男のくせに、小姑みたいにイチイチ煩いこと言うなど妻に云われた (50代)

■男だから弱音は掃くべきではない。と、兄弟から言われました。皆つらいのはわかるんだけど、兄弟に言

われるのが一番つらい (50代)

■男性2名、女性4名のガーデニング教室で班長を決めなければならない際に女性から班長は男性がしてくださいと言われた。私が班長は男性、女性で決めないで、じゃんけん決めてよと提案したが拒否され最終的に私が班長になった (60代)

■町内会の役割分担の時に女性だからできないと断られた (60代)

■マンションの理事長は男の方が良いと管理人から言われた (60代)

■デイサービスの高齢男性から結婚して姓を変えるのは女性だと言われた (60代)

(3) 質問内容についての賛否両論

ジェンダーに関する無意識の思い込みに対して、自身も違和感をもっていた(いる)という意見もある一方で、このような偏見の何が問題なのか(何がおかしいのか)分からない、とする回答も一定程度見られた。特に後者における内容は、実力のない女性が職場で登用されていることへの反発(逆差別ではないのかという意見)、現在のジェンダー平等を進める社会に対する疑問などである。なお後者はどちらかと言えば年齢が高い層に見られている。

①無意識の思い込みがなくなることを望む意見

■特にない。男性だからとか、女性だからとか言うのはダメだと思う! (20代)

■男らしい人がいいとかかわらん (20代)

■自分のことではないが、女性で仕事の中心に立っている人を見て、『女性なのにすごい』という発言をする人がいた。それは女性に対する差別でもあるし、同じ仕事をしている男性を『当たり前』としている差別でもあると思った (30代)

②ジェンダー平等の風潮に対する疑問

■女性の登用という名のもとに、実力が低いものが昇進した (50代)

■特筆すべき実績もなく特に人望もない女性社員が、管理職に占める女性の割合を高める社の目標達成のために、実績・人望に優れた男性社員よりも先に管理職に登用されたこと (50代)

■今までにないが、あまりに平等感が重視する風潮が現代あらわになりすぎでは・・・?女性主張が強すぎるのでは・・・? (50代)

■男女機会均等の名の下で、女性管理職を数字上で増やすために才能のある男性を採用せず、慣例を破り女性管理職を増やしている。逆セクハラ (60代)

■女性にお酒を注いでもらうと美味しいよねと言ったら、セクハラですかと言われた (60代)

- 肉体的な差は絶対的に有るので差別にならない程度にはしかたが無い (60代)
- 育児はおかあが良い (60代)
- 体力的なことで男女の差があるのは仕方なく、偏見ではないのでは (60代)
- 男は公私共にいちいち言い訳をしたり人に責任の転化をするべきではない。女はでしゃばって男の前に出て指図したり行動するべきでは無い (60代)
- 「男のくせに」と言われることがあっても、それが、当たり前だと思っていますので、特に偏見だとは思いません (60代)
- 女はおしゃべりだと思ったら怒られた (60代)
- 料理は女性の仕事、しかし時と場合による (60代)

V. 考察

(1) 認識と発信のジェンダー差

結果から考えられることとして、まずジェンダーに関する無意識の思い込みに関して、認識と発信の態度にジェンダー差が見られることである。実際、本調査の回答は圧倒的に男性が少ない。記載数から言えば、女性の方が、男性よりも多くの無意識の思い込みに対してアンテナを立てていて、バイアスに敏感な傾向がうかがえる。

しかし、自由回答を記入しなかった男性の中にも、問題を抱えている人はいるだろう。男性の自由回答が少ないという事実から、男性は女性よりも、ジェンダーの無意識の思い込みを認識させていないということは言えるかもしれない。しかし男性は女性よりも、たとえその違和感を認識していても、社会に対して発信し難いという状況もあるかもしれない。男性の認識と発信については、これまでの社会が男性に求めてきた「男らしさ」の影響も含めて考えなければならないだろう。

(2) ジェンダー平等を目指す風潮への戸惑い

次に考えられることは、ジェンダーに関する無意識の思い込み自体をなくすことの意味について、理解に苦しんでいる男性が一定程度いるということである。

特に比較的高い年齢層において、ジェンダー平等を目指す社会に対する疑問と、男女差別の認識において自身もつ戸惑いに対して、周囲の人々に共感を求めるような回答も見られている。

比較的若い年齢層 (20代・30代) の回答では、男女差別を是正しようとする社会の取り組みに反対意思を表明する意見よりも、男女の格差があることに同意し、変化を求める回答があった。

なお、回答の中には、昨今のジェンダー平等に向けた社会の動きに対して、逆差別ではないかと考えるもの

等、社会に疑問を投げかけるものが見られた。なぜこのような問題に調査が必要であるのか、性別役割分業のどこが問題なのか、表向きに生物的性差を根拠とした言動が批判の対象となることに納得がいかない、などの回答も存在した。

(3) 男性を苦しめているものはどこなのか

このような年代間の意識の相違も含めた、男性が生きづらさを感じる背景を考えたい。まず、性に中立で多様なライフスタイルを認めようとする社会の方向性が一般的には承認されつつある一方で、実際には、社会が男性に提供する価値観のバリエーションがまだ少ないのではないだろうか。今でも男性の生き方が社会で扱われる場合、どちらかと言えば経済的な価値観で評価されるような、画一的な見方が、規範として存在し続けていないだろうか。

現代日本の人々の価値観は多様化してきているというものの、伊藤公雄らを主とする内閣府の調査も指摘するように、男性が、主導権役割、経済的役割、社会的役割、私的感情の抑制等を求められることや、日常生活を妻に依存していること (内閣府, 2012)¹⁰、家長になる (である) ことが、男性としての最大の“価値あるロールモデル” (男性としての社会的役割と社会的成功を成し遂げた者) であるという規範が、多様な社会を生きようとする男性の自由の幅を狭めていないか。更にそのことが、従来型の規範に沿った生き方を信じて疑わなかった男性たちに苦しみを与えているのではないだろうか。

日本では、1990年代における家庭科の男女共修化によって、男性も性別役割分業に縛られない働き方や暮らしについて学んでいる。男女共修化に舵を取った家庭科は、性別役割分業を真っ向から否定したり、家族のあり方を崩壊させたりするものではない。しかしこのような学びを充分に持たなかった世代の男性の中には、そのような学びの経験が少ないために、日常生活の場で、まさに自分たちの働き方や暮らしが揺り動かされているような、これまで「頑張ってきた」自分が否定されるような気持ちになる人が、いるのかもしれない。

だからこそ家政学・家庭科は、将来の豊かな生活のビジョンを考える男性たちに対して、仕事だけではなく、家庭や地域や個人活動などの多様な軸を提供する学びであろうとしていることを、いっそう発信していくことが必要ではないだろうか。

(4) ジェンダーロールを強要する社会の本質を問う家政学と家庭科の必要性

そしてもう1つの課題は、性別に関係なく誰もが、実生活に今も隠れる資本主義と家父長制ベースの生活の規

範や価値を、問い直すことではないのだろうか。

これまでの社会において、女性が家事や家族のケア役割を期待され、男性が体力やカネを稼ぐことを求められてきた背景には、近代社会の「よりよい生活」の定義に、経済的な生産という価値観の優位性と、それらの男性への割り当てがなかつたであろうか。しかしそれが我々の社会に、環境破壊、人間関係の希薄化、効率重視による社会的弱者の切り捨て等の考えさえもたらしたことは、周知の事実である。

加えて、他者から言われたことや行動がジェンダーの無意識の思い込みだと本人が感じて、それが上司からの職務命令に含まれていたり、親や教員からのしつけや指導に含まれていたりするのであれば、男性が疑問を持つことや抗うことをためらう場合もあるだろう。

だからこそこれからの社会には、男性が“カネ”ベースの社会では見落とされがちであった、個人の人権や人と人との関係性（互恵関係など）を学ぶ機会がいつそう求められる。家政学と家庭科は、人が人と対等なパートナーシップを築くためにはどうしたらよいのか、誰かを弱い立場に貶めることなく、誰もが生活の質を担保される暮らしと社会はどうあればよいのかを、深く考え、議論することが求められるだろう。

VI. 結論

結論は以下3点である。第1に、日本の男性が、日常的に接触の多い人から、しかも「建前上、反論しにくい人」たちから、ジェンダーに関する無意識の思い込みの言葉や指示を受けているということである。

彼らとその発言を周囲から言われたり聞いたりしたことがあるかについて、自由回答から見える男性の経験としては、親、親族（義理の関係を含む）、妻、上司、同僚等、身近な人から、経済的資源の獲得、社会的地位の保持、ケア役割の無視、家の継承が多くを占める。ここには、それらの発言に反発し難い人間関係と社会構造も垣間見られる。

自由回答では、病気になっても仕事を辞めないこと（そもそも病気になつてはいけない）、いくら過酷な危険な仕事でも嫌だと言わないこと、一家の大黒柱として稼ぐこと、育児休業をとらないこと等を、周りから言われたという男性の経験が語られた。これらはいわば、従来の日本社会が男性に対して、資本主義という名の競争を棄権しないように統制してきたことのはほんの一部であろう。ここには、男性は有償労働を担うことが求められ、体調が悪くなったり病気になつたりすることは想像さえされないという社会の前提が見え隠れする。

しかし当然ながら男性は「サイボーグ」ではない。また現状の日本では、正社員に就くのは多くが男性である

が、男性なら転勤も残業も青天井で無制限に働かせてよいとする社会の在り方も見逃してはならない。

第2に、ジェンダーに関する無意識の思い込みへの反論に反論する人たちが存在することである。しかもそれは、男性だけではないことも指摘すべきことであろう。

自由回答から男性の多くが戸惑っている様子が見られたが、逆に思い込みを問題化することへの疑問も見られた。つまりそれは、無意識の思い込みの議論の余地そのものを疑う視点であった。例えば性別役割分業の正当性を主張する回答、逆に女性を優遇し過ぎて男性が被害に遭っているという意味での反論、このような調査についての意味を疑う回答なども見受けられた。

しかし注目すべきことは、そのような戸惑いを向けた回答の殆どが高い年齢層に集中し、20代や30代では、無意識の思い込みを問題とすることを批判する回答は存在したものの、割合としては少なかったことである。

また、無意識の思い込みを男性に投げかける側に、女性がいることも留意すべきであろう。自由回答の中には、「稼ぐこと」「早く就職すること」を促す女性に対して、困惑する男性の意見も見られた。社会において、男性と同じ権利や権限をもつ女性が少しずつではあるが増加する傾向がある中で、女性が固定化された役割を男性に押し付けていないかの点検も必要ではないだろうか。そうでなければ、男性が安心して「弱音」（敢えて弱音と表現するが、決してそれは弱いことを意味しない）を言える社会にはならない。ジェンダー平等の理念は、男女が共に、社会的・経済的資源を多く所有するという競争を行い、その競争に勝ち、高い地位に就いた者が、競争に負けた「弱い」者を支配することではない。

第3に、ジェンダーに関する無意識の思い込みから解き放たれ、性別に関係なく誰もの人権の尊重と差別の撤廃を進めるために家政学や家庭科ができることとして、数値化・定量化では測れない、生活の豊かさの価値も考える為の、生活設計の学びの充実を提案したい。

社会学者の上野千鶴子は、ジェンダーについて若い世代に語る中で、これまでの日本社会によって、「女の子の翼」が折られてきたことを指摘する（上野、2021）

¹¹。これまでの日本社会は、女性が社会的に（家庭の外で）挑戦することにブレーキをかけ、その個性と能力を発揮する機会を奪ってきたことを否定できないだろう。

一方、男の子には、競争に勝ち、社会的ステータスを獲得し、高い収入を得るための「英才教育」が、家庭・地域・学校などありとあらゆるところでなされてきたのかもしれない。

しかし家政学から考えた場合、男性は女性よりも、子どもの時から自分が食べたいものをつくったり、自分の好きな色の服を着たりという生活の営みの知識やスキル

をもつことも、他者の痛みに共感したり、自分の弱さを見せたり誰かを頼ったりするようなスキルをもつことも、制限されてきたと言わざるを得ない。このような、これまで男の子にはじゅうぶんに問うてこなかっただけで、本来は男の子が生きる上で不可欠なものを手に入れるための「男の子の翼」も折られてきたことを、社会全体で再確認する必要もあるだろう。

つまりこれからの男性には、力もちであることや稼ぐことや家の継承の強制よりも、ジェンダーロールから解放された自分自身の生き方について、主人公・当事者として考える機会を拓ける学びの必要性が、女性に劣らぬほど求められるのではないだろうか。身体も心も傷ついていることに気づいた男性が、その事実を恥ずかしがることも恐れることもなく、安全に、正当に主張できるための学習の機会が求められる。彼らが家庭科の中で、安全に「男らしさ」から離れてもよいことを知り、そのことを共に語れる場が必要ではないだろうか。

家庭科では、ジェンダーについて考える学習も、生活設計を考える学びも導入されているが、男性がカネや権力とは異なる視点から、豊かな生活とは何かを考える学び（自分の健康に気をつけること、自分の心を守る方法、他者の気持ちを気遣ったり寄り添ったりすること等）を更に推進していくことが求められるだろう。

現代の日本社会では、男女差別や実質的な家父長制度等は、完全には消滅していない。しかし VUCA 時代では、不安定で正解のない社会（不安な社会）を乗り越

え、自ら未来をつくる必要がある。

「男らしさ」から離れることは、決して「女々しい」ことでもなければ「雄々しい」ことでもない。おじけづくことも気負うこともない。そのような学びをした男性こそが、ジェンダー平等を目指す家政学・家庭科の明日を牽引する人になるのではないだろうか。

謝辞：内閣府男女共同参画局から、「令和3年度 性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査研究」に関して、自由回答のデータをダウンロードさせて頂き、考察する機会を頂きましたことを、心からお礼申し上げます。

文献

- 1 杉田俊介, 2022, 『男がづらい！ 資本主義社会の「弱者男性」論』, ワニブックス.
- 2 田中俊之, 2019, 『男子が10代のうちに考えておきたいこと』, 岩波書店.
- 3 伊藤公雄, 2016, 「はじめに一受難時代の男性の生と死」, 伊藤公雄・山中浩司編, 『とまどう男たち 生き方編』, 大阪大学出版会, p1-19
- 4 内閣府男女共同参画局, 2019, 男女共同参画社会に関する世論調査,
<https://survey.gov-online.go.jp/r01/r01-danjo/index.html>
(2022年11月26日閲覧)
- 5 NHK 放送文化研究所, 2021, ジェンダーに関する世論調査,
https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20210628_1.pdf
(2022年11月26日閲覧)
- 6 内閣府男女共同参画局, 2022, 男女共同参画白書令和4年版,
https://www.gender.go.jp/about_danjo/whitepaper/r04/zentai/html/zuhyo/zuhyo00-29.html
(2022年11月26日閲覧)
- 7 総務省, 2022, 令和3年社会生活基本調査,
<https://www.stat.go.jp/data/shakai/2021/kekka.html>
(2022年11月26日閲覧)
- 8 内閣府男女共同参画局, 2021, 令和3年度 性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査研究,
https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/seibetsu_r03.html (2022年11月26日閲覧)
- 9 大槻奈巳, 2015, 『職務格差 女性の活躍推進を阻む要因はなにか』, 勁草書房
- 10 内閣府男女共同参画局, 2012, 「男性にとっての男女共同参画」に関する意識調査報告書,
https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/dansei_ishiki/index.html (2022年11月26日閲覧)
- 11 上野千鶴子, 2021, 『女の子はどう生きるか 教えて、上野先生!』, 岩波書店